

# 新しい形の修学旅行

－ 緊急事態宣言下でのオンライン人力車の実施について －

## 1. はじめに

本校は、荒川を隔てて東京都に隣接する埼玉県南端の川口市に、昭和12年に創立された、今年創立84年目を迎える工業高校の伝統校である。川口市は荒川等の航路を利用して原料や製品を運搬できるため、江戸時代より鋳物産業が盛んな街であり、かつては「鋳物の街 川口」あるいは「キューポラのある街」としても有名であった。本校も地場産業である鋳物産業を支える人材を育成する目的で設立されたが、現在では大規模工場は地方に移転してしまい、跡地にはマンション群が林立するなど、周辺環境はすっかり様変わりしている。

また、かつては部活動が盛んな学校であり、サッカー部・ハンドボール部・バスケットボール部が全国大会に出場している他、特に野球部は昭和52年8月の「第59回全国高等学校野球選手権大会」に出場して活躍した実績がある。最近では、機械研究部が平成25年10月、1リッターのガソリンで何km走行できるかを競う、「第33回HONDAエコマイレージチャレンジ2013」で全国優勝、掃除部が令和2年11月、高校生がゴミ拾いを競い合い「高校生ゴミ拾い日本一」を決める、「海と日本プロジェクト スポGOMI 甲子園2020」で全国優勝するなど、生徒達は個性溢れる活躍をしている。

埼玉県立川口工業高等学校 教諭 天内 海渡

本校は全定併置高であり、全日制課程には、機械科、電気科、情報通信科の3学科、単位制による定時制の課程には工業技術科が設置されている。

「地学地就」という理念を掲げ、インターシップ等では地元企業等に様々な形で御協力を頂いている。そのため、卒業生の7割以上が、県内企業を中心に就職をしている。令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、例年とは異なる就職スケジュールとなってしまう、進路指導に支障をきたす時期もあったが、結果的には希望者全員の就職が内定した。

## 2. オンライン人力車について

### (1) 鹿児島への修学旅行を計画

本校での修学旅行先選定は、1年次春に当該学年団の教職員により検討される。これまでの



図1 校舎外観

学年団では沖縄への修学旅行に決定することが多かったが、当該学年団は候補地を沖縄に限定せず、鹿児島や長崎にも拡大して、いろいろな方面を検討した。その中で鹿児島は野外活動や体験学習が出来るといったことだけでなく、平和学習の一環として知覧特攻平和会館を見学出来るということに最大の魅力を感じた。工業高校生が持っているものづくりに対する情熱は、普通高校生に比べて圧倒的に高く、同時に誇りを持っている生徒が多い。その工業高校生達に、戦争で用いた戦闘機等の工業製品を見学してもらうことによって、戦時中の困難な状況の中で、如何に精巧な工業製品が作られていたのかその技術水準の高さを感じてもらおうと共に、二度と戦争を起こしてはならないという平和教育が可能であるという観点から、鹿児島への修学旅行に決定した。

## (2) 緊急事態宣言による修学旅行の中止

修学旅行は、令和3年2月2日（火）から5日（金）までの3泊4日で計画されていた。

埼玉県からは、令和2年8月、修学旅行の実施時期等について学校が希望すれば令和3年度に修学旅行を延期する事が可能とする旨の通知が発出されていたが、本校では3年次になると就職等の進路指導行事が立て込んでおり、実施時期を延期する事はしないと判断した。

そのため、事前学習等の中で、修学旅行期間中に感染症対策を徹底することや、感染が疑われるような場合には修学旅行に参加することが出来なくなることを周知していた。

しかし、新型コロナウイルス感染症のまん延状況を受けて、国は令和3年1月8日から2月7日まで、埼玉県を含む首都圏一都三県を対象とした2度目の緊急事態宣言を発令した。学年団で話し合い、修学旅行は中止と判断した。因みに、修学旅行出発3週間前までにキャンセルが出来たため、キャンセル料は発生しなかった。

## (3) 代替案の検討

修学旅行中止を各担任から生徒達に伝えた際の反応は様々であった。首都圏の新型コロナウイルス感染症のまん延状況をみて、国が緊急事態宣言を発令し、それを受けての中止であったため、ほとんどの生徒達は致し方ない決定であったと理解を示してくれたが、本音としては、修学旅行に行きたかったという思いであった。

学年団の教職員は、生徒達の心情をくみ取り、何か修学旅行に代わる行事等が出来ないものか、旅行業者も交えながら代替案の検討を始めることになった。

## (4) オンライン人力車とは

代替案を検討する中で、どのような内容にしていくか、いくつかの方向性が出された。

- ① 生徒同士が互いに絆を深め、思い出が作れるようなレクリエーション
- ② 修学旅行の行程に含まれているような体験（チャーターフライトや体験学習等）
- ③ 平和学習

以上3点を踏まえて、学年団で代替案を探していたところ、オンライン人力車の俣夫を知っている者がおり、代替案として浮上した。

オンライン人力車とは、浅草「福ろう屋」の俣夫である三浦翔平さんが、新型コロナウイルス感染症の影響で観光客が激減した浅草に恩返しをしたいという思いから発案した新サービスである。人力車にカメラを取り付け浅草の観光名所を巡り、オンラインで繋がっている参加者とは双方向での会話や質問を交えながら観光案内をしてくれるので、参加者は居ながらにして実際に人力車に乗っているような揺れや視点の高さを感じることが出来るものである。

学年団で検討した結果、レクリエーションの要素と、オンラインを使った新たな業務形態を体験することが出来るといった観点から、代替案として実施することにした。ただし、前例の

ない企画であったため、事前に三浦さんと担当者との間でオンライン会議を行い、コースや映像を確認するなど、綿密な準備が行われた。

#### (5) オンライン人力車当日

当日の流れは以下の通りであった。

- 13時30分開始，所要時間40分
- Zoomを使い，各クラスのプロジェクターからスクリーンに投影して視聴
- 俵夫の豆知識や質問に対して，生徒達と対話をしながら浅草観光を進める。
- 人力車が巡るコースは，雷門，東京スカイツリー，浅草寺の順番

時間通り開始されたが，オンラインの設定が各クラスで統一されるまで多少時間がかかり，正味の観光時間は35分程度になってしまった。

送られてくる映像・音声ともに非常にクリアであり，周辺の雑音までかすかに聞き取れることが，より臨場感を高めてくれた。

俵夫の三浦さんの語り口が軽妙で，生徒達への問いかけも多用してくれたので，生徒達は次第に映像に引き込まれ，最後まで飽きずに集中して視聴することが出来た。

また当日は，テレビ朝日「スーパーJチャンネル」が，オンライン人力車が緊急事態宣言で困っている人達に一役買っているということで，「新しい形の修学旅行」として教室の様子を取材してくれた。



図2 オンライン人力車の様子①



図3 オンライン人力車の様子②



図4 オンライン人力車の様子③



図5 オンライン人力車の様子④



図6 オンライン人力車の様子⑤



図7 テレビ朝日「スーパーJチャンネル」取材

#### (6) 生徒の感想

当日は2年生約200人が6クラスに分かれてオンライン人力車の体験をした。

三浦さんから生徒へ問いかけをする際には、答えやすいようにクラスを指名してくれていた。オンラインではカメラ目線での問いかけになるため、視聴している全員が質問を受けたように感じるが、実際に各クラスでバラバラに回答してしまえば取捨がつかなくなってしまう。誰が答えればよいか分かる問いかけであったので、クラス代表やクラス全員が答える際には、各教室から歓声が上がり大いに盛り上がっていた。

オンライン人力車の体験を終えた生徒達の感想には以下のようなものがあった。

「修学旅行がなくなりショックであった。みんなと旅館やホテルに滞在して、同じ時間を過ごすのが楽しみであった。しかし、代替案としてオンライン人力車を体験することが出来て、みんなと一緒に楽しく笑う時間を持てたことがとても良かった。」

「三浦さんのオンラインで人力車体験を行うといった発想がとても素晴らしかった。」

### 3. おわりに

新型コロナウイルス感染症によって、学校は大きく揺れている。令和3年度になっても、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が日本各地で発令されており、各学校においては、分散登校やオンライン学習、部活動の活動制限など、様々な制約を受けながらも、学校教育活動を継続し、子供の健やかな学びを保障していくことが求められている。そのためには、これまで当たり前と思っていたことを根本から見直していくこと、あるいは、このような状況の中で、ゼロベースで学校行事等を新しく作り上げていくことが求められている。

本校では、今回の修学旅行中止を受けて、これまで2学年の2月に実施していた修学旅行を、インフルエンザ等を含めた感染症の発症が少なくなる3学年の5月に実施することにした。そのため、進路指導部が2学年から段階的に就職指導に取り組むことにしたり、教務部が年間行事計画を修正したりするなど、これまで当たり前に行ってきた年間行事計画を、学校全体で大きく見直すことにした。しかし、これによりこれまで進路指導部が長年懸案としていた2学年への指導時間不足が解消されることに繋がった。日頃から教職員が課題意識を持って教育活動を実践していたからこそ、今回のような大きな改革がスムーズに実現することに繋がったと思っている。

教室内で教員と生徒達がマスクを外し、密になりながら大きな声を出して笑い合っている姿を見ることは、この先いつになるかわからない。しかし、いつか訪れるその時に、コロナ以前の学校に戻るのではなく、新しい学校に生まれ変わってられるように、これからも様々な学校改革に取り組んでいきたい。